文法　活用のある自立語1

◆**用言**…自立語で、活用があり、単独で述語になることのできる単語です。動詞・形容詞・形容動詞の三つが用言に属します。

◆**動詞**…動作・作用・存在を表し、言い切るときはウ段の音で終わります。

・動詞の活用形…未然形（「ない・う」などに続く）・連用形（「ます・た」などに続く）・終止形（言い切る）・連体形（体言などに続く）・仮定形（「ば」などに続く）・命令形（命令して言い切る）の六つです。

・動詞の活用の種類…次の五種類に分けられます。

① 五段活用…ア・イ・ウ・エ・オの五段にわたって活用する。例　読む
② 上一段活用…イ段だけで活用する。例　見る
③ 下一段活用…エ段だけで活用する。例　混ぜる
④ カ行変格活用…カ行で特殊な活用をする。「来る」一語。
⑤ サ行変格活用…サ行で特殊な活用をする。「する」「～する」。

◆**形容詞・形容動詞**…性質・状態を表し、形容詞は「い」、形容動詞は「だ・です」で言い切ります。

・形容詞・形容動詞の活用形…未然形（「う」などに続く）・連用形（「た・ない」などに続く）・終止形（言い切る）・連体形（体言などに続く）・仮定形（「ば」などに続く）の五つです。命令形はありません。

1 次の文章の中から用言を探し、動詞・形容詞・形容動詞に分類し、言い切りの形で書きなさい。形容動詞は「～だ」の形で答えること。

今朝はとても寒かったが、祖父は朝のウォーキングから帰り、私に向かって元気な声で「おはよう」と声をかけた。優しくほほえんだその顔は穏やかだった。

動詞　（　　）

形容詞　（　　）

形容動詞　（　　）

2 次の各文の――線の動詞のA活用形と、B活用の種類をあとから選び、それぞれ記号で答えなさい。

(1) 先生は生徒を校庭に集めた。　A（　　）　B（　　）
(2) 鳥の鳴く声が聞こえる。　A（　　）　B（　　）
(3) 試合に備えて練習をしよう。　A（　　）　B（　　）
(4) この駅ではまだ降りないよ。　A（　　）　B（　　）
(5) 約束の時間なのに、友達はまだ来ない。　A（　　）　B（　　）
(6) 長時間煮れば、もっとおいしくなる。　A（　　）　B（　　）
(7) 「休みには田舎で過ごす。」と彼は言った。　A（　　）　B（　　）
(8) 遠くまでボールを投げろ。　A（　　）　B（　　）
(9) 読んだ本を友達に貸した。　A（　　）　B（　　）

A　ア 未然形　イ 連用形　ウ 終止形　エ 連体形　オ 仮定形　カ 命令形

B　キ 五段活用　ク 上一段活用　ケ 下一段活用　コ カ行変格活用　サ サ行変格活用

3 次の各文の――線の形容詞・形容動詞の活用形を書きなさい。

(1) もし忙しければ、私が手伝います。（　　）
(2) 昨日見た映画は、とてもおもしろかった。（　　）
(3) 窓からさわやかな風が吹き込んできた。（　　）
(4) この野菜は新鮮でない。（　　）

6/21 10

11 文学的文章の読み方・解き方

例題

ねらい　読解▼場面の様子や人物の言動をとらえ、心情を理解する。
文法▼活用のある自立語2

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

物心つく前に父を亡くした小学校二年生の真一は、さかあがりができずに困っていた。そこに見知らぬ男が現れてさかあがりを教えてくれた。

瞼が重くなった。いけない、と思ったとたん、涙があふれた。歯を食いしばったすすり泣きは、やがて嗚咽交じりの涙に変わり、①最後は鉄棒に目元をおしつけて、声をあげて泣いた。冷たい鉄棒に涙の温もりが滲みていく。錆びた鉄のにおいに、しょっぱさが溶けた。

「もういっぺん、やってみい。」

男が言った。濁った声を、もう怖いとは感じなかった。一度泣いてしまえば、悲しさも恥ずかしさも消えて、残ったのは誰にぶつけていいかわからない悔しさだけだった。

「今度は脚を上げるときに『このやろう！』思うてやってみい。肘をもっと曲げて、脚いうよりヘソを鉄棒につけるつもりで、腕と腹に『くそったれ』いう力を入れるんじゃ。目もつぶっとけ。そうしたら、できるわい。」

②真一は鉄棒を強く握りしめた。

もう一度――これで最後。

（重松清『日曜日の夕刊』より「さかあがりの神様」）

問一　――線①「最後は鉄棒に目元をおしつけて、声をあげて泣いた」とありますが、このような真一の心情が変化していきます。どう変化したかを表現している一文を文中から探し、その初めの五字を書き抜きなさい。

問二　――線②「真一は鉄棒を強く握りしめた」とありますが、このときの真一の心情として最も適切なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア　さかあがりのできない自分にあせりを感じている。
イ　男の言うことは本当だろうかと疑っている。
ウ　気を取り直して、今度こそと決意を固めている。
エ　また失敗するんだろうなとあきらめている。

（　　）

◆**場面の様子をとらえる**

文学的文章を読むにあたっては、場面・会話・行動・心情のかかわりを読み取ることが大切です。どんな場面で、どんな会話や行動をし、どんな心情でいるのかを、別々に読み取るのではなく、それぞれがどのようにかかわり合うかを総合的にとらえます。

この文章は、さかあがりができずに泣き出してしまった真一に、男がアドバイスをしている場面です。男の言葉に、真一がどのように反応しているかをとらえます。

◆**会話や行動をとらえ、心情を理解する**

会話や行動に人物の心情は表れます。描かれている会話や行動は、どんな心情の表れなのかを読み取ります。心情の理由は会話や行動にあり、会話や行動の理由は心情にあります。また、心情は変化するものであることにも注意しましょう。

この文章では、声をあげて泣いたことによって真一の心情がどのように変化したかに注目します。また、男のアドバイスを受けて、どのような心情でさかあがりに挑んでいるのかをとらえます。

練習問題 1

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

第一子が生まれたのは、私が二十六歳の時であった。*1分娩室の扉が開いて中年の*2看護婦があらわれた。①胸に一匹の猿を抱いていた。しわだらけの顔が不気味にうごめいている。

「立派な男のお子さんですよう。ほうら、お父さんにそっくりだこと」

猿ではなくて人類で、しかも自分の息子なのだった。勇気をふりしぼって②しげしげ眺めているうちに気がついたことがあった。手の指が十本とも異様に長いのである。

「やっぱりこいつは、猿だな」と私。

「でも、③指の長い赤ちゃんて優秀なんですよ」

看護婦はなぐさめるような顔で言った。

「へえ、どうして」

「だって指が長くないとピアノやヴァイオリンはひけませんもの。指が長いのって、それだけでたいへんな才能なんですよ」

言われてみれば、なるほどと感心した。音楽家だけではない。書道家も画家も彫刻家も小説家も、芸術家はたしかにみな指をつかう。こいつは、もしかするともしかするぞ、と私は思った。わが息子は将来、その長い指を駆使して世界的な弦楽器奏者になる運命かもしれない…、既にして親馬鹿なのである。私は帰宅すると息子の名前を必死で考えた。そうして〝弦〟と命名したのだった。

第二子は、女の子だった。

当時、私たち一家は神戸のひよどり越の坂を登った山の上の団地に住んでいたので、〝静〟と命名した。ひよどり越といえば、*3源義経であろう。源義経の恋人といえば、これはもう昔から*4静御前と④相場は決っている。

第三子も女の子だった。

「たった今、生まれましたよ」

産院にいる妻の母親から電話が入った時、私は作曲のためにギターの弦を奏でている真最中であった。それで〝奏〟と命名した。

さて、あまたある日本語の中で最もひんぱんにつかうのは、どんな日本語であろう。思うにそれは、⑤自分の名前ではなかろうか。自分の名前を書かない日は一日とてない。自分の名前を呼ばれない日もまた一日とてない。しかもそういう日々が一生涯つづくのである。

子供たちの名前を考えた時、私が気をつけたのはこういうことであった。好きであろうとなかろうと、人は自分の名前と死ぬまでつきあってゆかねばならない。もしそうであるならば、せいぜい美しい意味内容と心地良い響きをもった日本語を一文字だけ捜し出そう。それを名前として子供たちに贈ろうではないか…。私の名前である〝満〟の一文字も、早死した父親からもらい受けたのだ。⑥今度は私が贈る番なのだ。

（新井満『死んだら風に生まれかわる』）

＊1　分娩室＝産科において、お産を行うために設けられた部屋。
＊2　看護婦＝現在は「看護師」と呼ばれている。
＊3　源義経＝平安時代末期の武将。鎌倉幕府を開いた源頼朝の異母弟。
＊4　静御前＝源義経に見初められた女性。白拍子（歌舞の舞い手）だった。

問一〈心情〉――線①「胸に一匹の猿を抱いていた」とありますが、これを見たときの筆者の気持ちとして最も適切なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア　生まれたての赤ちゃんがあまりに猿に似ていることがおかしくてたまらない気持ち
イ　生まれたての赤ちゃんが猿にそっくりで自分の息子だとはにわかには信じられない気持ち
ウ　生まれたての赤ちゃんのかわいらしさを素直に表現するのを恥ずかしく思う気持ち

エ　生まれたての赤ちゃんのかわいらしさを猿にたとえて、かわいい子を産んでくれた妻に感謝する気持ち

（　　）

問二〈表現〉――線②「しげしげ眺めている」とはどのような様子ですか。最も適切なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア　物思いにふけりながら、ぼんやり見ている様子
イ　かたわらで成り行きを温かく見守っている様子
ウ　広い範囲をのんびりと見渡している様子
エ　細かいところまでじっと見ている様子

（　　）

問三〈内容理解〉――線③「指の長い赤ちゃんて優秀なんですよ」とありますが、看護婦はどのような気持ちからこの発言をしたのですか。

（　　）

問四〈語句〉――線④「相場は決っている」とは、ここではどのような意味ですか。最も適切なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア　二人が出会う場所が決められている
イ　世間でそのようにうわさされている
ウ　誰もが似合いの関係だと認めている
エ　一般にそういうものだと考えられている

（　　）

問五〈内容理解〉――線⑤「自分の名前」とありますが、筆者はこれをどのようなものだと考えていますか。文中の言葉を使って書きなさい。

問六〈心情・内容理解〉――線⑥「今度は私が贈る番なのだ」に表れている筆者の心情を説明した次の文の［　　］A・Bにあてはまる言葉を、Aは十七字、Bは十四字で文中から探し、その初めと終わりの五字をそれぞれ書き抜きなさい。

［A］ものだからこそ、［B］をもった日本語の一文字を名前として子供たちに贈ってやりたいという思い

A	B
～	～

問七〈内容理解〉筆者が命名した子供たちの名前の由来として誤っているものを次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　子供の将来の可能性を期待して命名した。
イ　看護婦の人生観に共感して命名した。
ウ　子供が生まれた瞬間に自分がしていた行動から命名した。
エ　住んでいる地域に関係する人物から命名した。

（　　）

漢字の読み書き11

□①　暴言を吐く。（　　）
□②　つめをかむ癖がある。（　　）
□③　即座に回答を出す。（　　）
□④　台風で船が遭難する。（　　）
□⑤　抽選で入場者を決める。（　　）
□⑥　英語に翻訳する。（　　）
□⑦　王が家来を伴う。（　　）
□⑧　一次試験が免除される。（　　）
□⑨　空気が濁る。（　　）
□⑩　野蛮な行為をたしなめる。（　　）
□⑪　失敗の原因がハンメイする。（　　）
□⑫　高層ビルをセッケイする。（　　）
□⑬　服がヤブれる。（　　）
□⑭　郊外にテンキョする。（　　）
□⑮　町の人口がへる。（　　）

練習問題2

1　次の文章は、「少女は、母親と初めて訪れた神社に奉納されている白い神馬*1が、誰もいない馬小屋で海を見つめて佇んでいる姿に、心ひかれた。」という話に続く部分です。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

二度目の時、馬小屋の前に①はちょっとした人だかりがしていた。少女が近寄って見ると、最初の時と同じように海にむかっておとなしく佇んでいる神馬の前で、赤ら顔の中年の男が、和服の懐から大きな折り財布を取り出すところだった。

素焼きの小皿に盛られた神馬の餌は、麦と人参の二種類であった。男はどちらも買った。そして髪に花飾りをつけた幼女に人参の皿を与え、両手で後ろから抱き上げると、石の台の窪みに餌を移させた。馬は、その窪みを鼻先と唇で拭うようにしながら人参を口に移したが、食べ終わるか終わらないうちに、突然大声に男が叫んだ。

「お回り！」

あの美しい大きな目を、まぶたがゆっくり覆った。しばらくそうなっていた。再びまぶたが開くと、神馬は首を上下に振ってから、枯れ草の敷き詰められている床を踏んで、左手に静かに回りはじめた。少女は、［　　］。馬小屋はあまり広くはなく、馬がその中を一巡するのにさほどの時間もかからなかったけれど、少女にはずいぶん長い道程に感じられた。

格子の隙間に白い顔が戻った時、中年の男は、今度は男の児を抱き上げて麦を移させた。馬は形よく開いた耳をぴくぴくさせながら、首を深く傾けて石の台に顔を寄せて来た。

幼女が新しい人参をせがみ、男の児が次の麦を求めた。「よし、よし。いくらでも買ってやるぞ。」赤ら顔の男は、皿の数に生き甲斐を感じているらしかった。子供の声の弾みに、父親の実感をかみしめているらしかった。

「オマワリ！」

男の声に、子供達の声が重なった。神馬はたてがみを振りながら回っては食べ、食べては回った。少女は、白い馬を見ているはずであった。神馬を見ているはずであった。けれども目ざめたまま不思議な生きものの夢をみているようだというのが少女の実感であった。少女はそうしているうちに、どういうわけか、自分が非常に悲しい気分になっていることに気づいた。

三度目の時、神馬はまぶたを閉じたまま枯れ草の上に横たわっていた。前足と後ろ足を行儀よく揃えて海の方に流している。時々身震いして薄くまぶたを開いたが、つづきの眠りに帰るようにじきに閉じた。大きな体が無防備になると、小さな体以上にあどけなく見えることがある。横たわっている馬は、参詣人の呼びかけにも、命令にも少しも反応を示さないので、馬小屋の前の人だかりはすぐに崩れたが、いっときするとまた新しい人が寄った。

少女は、この馬は今日は病気かもしれないと思った。そう思って見ると、気のせいか息づかいがせわしそうに見えた。しかし、よくながめているうちに、病気ではなくて、ちょっと休んでいるのかもしれないと思うようになった。神馬にもお休みがあっていい、そうでなければ目がまわってしまう。

更にまたその次に考えたのは、②もしかするとあのようにして人に抗っているのかもしれないということだった。ただそれを少しも疑わないためには、この神馬の目が優し過ぎた。馬には、これまで一度も手を触れたことがないし、馬の後ろを通ってはいけないとお母さんにもよく注意されてきたけれど、あの目と同じようにわたしも優しければ、枯れ草の上にひざまずいてほおをなでても、この馬は決して暴れたりはしないだろうと思った。

新しい人だかりが崩れ、足音がばらばらと本殿の方へ遠ざかっていった。少女はこの時も一緒の母親に、もう少しここにいて、と言った。母親はうなずいた。石の台には、人参が載せられたままになっている。その縁に止まった烏が、馬の方を見、母親の方を見、していた。

不意に、前足を引き寄せるようにして馬が起き上がった。尾で脇腹を打ち、前足と後ろ足を片方ずつかわるがわる折り曲げたりしていたが、威勢よく身震いすると、静かに石の台に近づいた。食欲をみせた。少女は人参を一皿求め、母親に背をつかまれたまま伸び上がるようにしてそれを石台に移した。

③わたしの餌を食べている。そのとおりであった。少女は、はじめてただの見物人ではなくなったことに満足した。窪みはすぐに空になった。すると神馬は、声もかけられないのに、予定の行動のようにあの見慣れた左回りをはじめたのである。少女は、まるで自分が、お回り！　と叫びでもしたような恐さにうろたえながら母親と顔を見合わせ、生きものの足どりを追った。

蹄は規則正しく床を踏んだ。神馬は例のように一巡すると、ほとんど機械的に石の台に顔を寄せ、空の窪みをこれもほとんど機械的に舐めると、再びまた床を踏んで回り続けるのだった。④満足感はとっくに消え去っていた。

（竹西寛子『神馬』）

＊1　神馬＝神様がお乗りになるために、神社などに奉納される馬。
＊2　抗っている＝抵抗している。

★**問一**　〈場面〉　――線①「ちょっとした人だかりがしていた」とありますが、どうして人だかりができていたのですか。次の［　　］にあてはまる言葉を二十字以内で書きなさい。

神馬が、［　　］ところを見るため。

★**問二**　〈文脈・心情〉　［　　］にあてはまる言葉として最も適切なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア　目を遊ばせた
イ　目を見はった
ウ　目をそむけた
エ　目を細めた

（　　）

★**問三**　〈場面〉　――線②「もしかするとあのようにして人に抗っているのかもしれない」とありますが、少女がそう思ったのは、馬のどんな様子を見たからですか。次の［　　］A・Bにあてはまる言葉を、Aは二十五字以内、Bは二十字以内で文中から探し、それぞれその初めと終わりの五字を書き抜きなさい。

馬が［A］で、［B］いる様子

A　～
B　～

★**問四**　〈心情〉　――線③「わたしの餌を食べている」とありますが、このときの少女はどんな気持ちでいますか。文中の言葉を使って二十五字以内で書きなさい。

★**問五**　〈心情〉　――線④「満足感はとっくに消え去っていた」のは、なぜですか。「思い込み」という言葉を使って、心情の変化がわかるように書きなさい。

11 文学的文章の読み方・解き方

文学的文章の読解で重要な、場面・会話・行動・心情がどうかかわり合っているのかを読み取るための単元。

文学的文章の読解では、場面・会話・行動・心情の読み取りが中心になる。これらは、ばらばらに存在しているのではなく、それぞれが関係し合っている。文学的文章を読むということは、その関係をとらえるということでもある。

この人物は、この場面で、なぜ、こんな会話や行動をするのか、どんな気持ちでいるのかなど、行動・会話・心情をとらえ、その理由を表現から読み取っていく。

また、随筆では、筆者の経験がどのような感想・意見となって表れているかをとらえる。

P 65

〔例題〕

1 問一　一度泣いて　　問二　ウ

解説

問一　まず、――線①の心情をとらえる。さかあがりができずに泣いているのだから、悔しさ・悲しさ・情けなさ・恥ずかしさなどがあったととらえられるだろう。このような気持ちが泣いてしまったことで解消され、「残ったのは誰にぶつけていいかわからない悔しさだけだった」（7～8行目）のである。

問二　さかあがりができない「悔しさ」をかかえた真一は、男に『『このやろう！』思うてやってみい」「『くそったれ』いうて力を入れるんじゃ」と言われ、「もう一度――これで最後」と思って、「鉄棒を強く握りしめた」のである。つまり、〝今度こそ成功させてみせる〟と決意を固めたのである。

P 66

〔練習問題1〕

1 問一　イ　　問二　エ

問三　指の長さから音楽家の才能があることを伝えて、父親をなぐさめようと思う気持ち

問四　エ

問五　日本語の中で最もひんぱんにつかわれ、一生涯書きつづけたり呼ばれつづけたりするもの

問六　A　死ぬまでつ～ばならない　　B　美しい意味～地良い響き

問七　イ

解説

問一　「猿」と表現されているが、初めに「第一子」とあるので、筆者の赤ちゃんであることがわかる。また直後の「しわだらけの顔が不気味にうごめいている」、5行目の「猿ではなくて人類で、しかも自分の息子」から、赤ちゃんを見てすぐに「かわいい」と思うことができなかったことがわかる。

問二　じっくりと見るときに「しげしげ」という表現をする。

問三　――線③は赤ちゃんを「猿」と言った筆者に対する看護婦の発言である。「指が長いのって、それだけでたいへんな才能」という言葉を看護婦は「なぐさめるような顔」で言っている。その言葉に筆者は納得し、「世界的な弦楽器奏者になる運命かもしれない」と親馬鹿ぶりを発揮している。

問四　「相場が決まっている」とは、世間で一般的にそういうものだと考えられているという意味。「源義経」にはさまざまな伝説や言い伝えなどがあり、その中で「源義経」の恋人であったとされる女性の最も有力な説が「静御前」である。

問五　直前の27～28行目の「あまたある日本語の中で最もひんぱんにつかうのは、どんな日本語であろう」という問いを受けて「自分の名前ではなかろうか」と答えている。また、このあとの「自分の名前を書かない日は一日とてない……一生涯つづく」の部分からも自分の名前に対する筆者の考えが読み取れる。

問六　さまざまな日本語の中で、特にどのような一文字を贈ろうと考えているかを読み取る。31行目に「私が気をつけたのはこういうことであった」とあるので、このあとの部分から字数に合うように書き抜けばよい。

問七　アは「弦」と名付けたときに、ウは「奏」と名付けたときに、エは「静」と名付けたときに一致する。

P 67

〔漢字の読み書き11〕

① は　② くせ　③ そくざ　④ そうなん　⑤ ちゅうせん　⑥ ほんやく

⑦ ともな　⑧ めんじょ　⑨ にご　⑩ やばん　⑪ 判明　⑫ 設計

⑬ 破　⑭ 転居　⑮ 滅

P 68

〔練習問題2〕

1 問一　餌を与えられると馬小屋の中を回る　　問二　イ

問三　A　参詣人の呼～を示さない　　B　まぶたを閉～横たわって

問四　ただの見物人ではなくなったことに満足している。

問五　神馬と心が通じ合ったと満足していたが、自分の思い込みにすぎないと気づかされてがっかりしたから。

解説

問一　男とその子供たちと神馬の様子を描写している場面から読み取る。餌を与えられた神馬が、「お回り！」という声とともに馬小屋の中を回っている様子が描写されている。人だかりがしているのは、その馬の様子を見物するためだったのである。

問二　場面の様子から、少女は神馬の様子を興味深く見ていることが読み取れる。そこで、

ア・ウは外れる。エは、喜びやうれしさ、満足の気持ちを表す慣用句だが、この場面で少女がそのような気持ちを抱いている描写はない。ここは、神馬の動きに少女が驚いている様子を描写しているので、イの「目を見はった」が適切である。

問三　「二度目の時」は、餌を与えられた神馬が馬小屋の中を回っている様子が描写されていたが、「三度目の時」の場面では、神馬は横たわったままで動かない。その様子を見た少女は、「二度目の時」との対比で、「あのようにして人に抗って（＝抵抗して）いるのかもしれない」と思ったのである。「あのようにして」と「抗って」の具体的な様子を文中から抜き出せばよい。

問四　――線③のすぐあとに、「少女は、はじめてただの見物人ではなくなったことに満足した」とあることに着目する。それまでは、人が餌をやるのを見るだけの「ただの見物人」だったが、ついに自分も餌をやる側になり、しかも馬がその餌をちゃんと食べたので、少女は満足感を覚えたのである。

問五　見物人を無視するようにしていた神馬が、自分の与えた餌を食べたことで、少女は神馬と心が通じたように感じていた。しかし、神馬のほうは少女に特別なものを感じたわけではなく、餌がなくても、ただ「機械的に」餌用の石の台を舐め、回り続けている。〝心が通じた〟と少女が感じたのは、「思い込み」だったのである。その結果、満足感も消えてしまったのである。神馬の様子を描写した最後の段落では、「規則正しく」「例のように」「機械的に」といった表現が使われていることに注目しよう。神馬の行動は、神馬の意志や気持ちによるものではないことが強調されているのである。

P 70

〔活用のある自立語2〕

1 イ音便…かわい　　撥音便…飲ん　　促音便…走り回っ

2 (1) イ・届ける　(2) ア・落ちる　(3) ア・鳴る　(4) イ・焼く

(5) イ・開ける

3 (1) 飛べる　(2) 読める　(3) ×　(4) 取れる　(5) 買える　(6) ×

4 (1) イ　(2) イ　(3) ア

解説

1　五段活用動詞の連用形の活用語尾が「い」（イ音便）、「ん」（撥音便）、「っ」（促音便）に変化したものを探せばよい。促音便の「走り回っ」を「回っ」と答えないようにする。「走り回る」は「走る」と「回る」が組み合わさってできた複合語で、「走り回る」で一語の動詞である。

2　「～を」という対象があるかないかで判断する。「～を」があれば他動詞、なければ自動詞。対応する動詞を考える場合は、たとえば、(1)では、「届く」という自動詞に対応する他動詞を考えるのだから、「荷物を届ける」のように「～を」につながる対応する言葉を考える。逆に、他動詞に対応する自動詞を考える場合は、「～が」につながる言葉を考える。

3　それぞれに対応する「～できる」という言葉を考える。ただし、可能動詞は五段活用動詞のみに対応し、他の活用の動詞に対応する可能動詞はない。(3)の「寝る」は下一段活用、(6)の「着る」は上一段活用だから、可能動詞はない。これの動詞を可能の意味を表すようにするには、「寝られる」「着られる」のように、可能の助動詞「られる」を使う。

4　本来の意味が薄れ、上の言葉を補助しているほうを選べばよい。また、補助動詞の直前には「て（で）」がくることもヒントにするとよい。(1)のアの「ある」は「存在する」、(2)のアの「くる」は「来る」、(3)のイの「しまう」は「片づける」という本来の意味である。